

名人 問坂 義一(68) 大野郡宮村

聞き手 守屋 徹郎 岐阜農林高等学校一年

宮笠作り 貴重な財産

父親と自然 ――どちらも温かく、また厳しい――

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもつてその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては現在、23名の「森の名手・名人」がいます。

この「森の名手・名人」を「森の」聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。

なお、年齢・住所・学年は取材当時のものです。

1. 宮笠との歩み

笠作りなんかは、学校に行く前から作ってたね。それが6歳ぐらいからで、子供でも作れる部分があったでそういうのは子供らで作って、家族全員で笠作りをしたんや。笠作りっていうのは、年がら年中やるっていうわけじゃなくて農閑期、あの100名が終わって11月から3月ごろまで、だいたい5ヶ月間が宮笠を作る1つの大きなシーズンやね。だから宮笠は副職やなあ。江戸時代から約300年ぐれえやってたと聞いているけどその時代からずっと副職やったんやねえ。一番の全盛期は、昭和の20年から30年ぐらいまでやったなあ。

僕が小さい頃は、やっぱり希望を持つってても、学校に行つて勉強したくても行けなかったっていう時代やったなあ。そやけれども僕は、ドライバーが好きだから、運転手に憧れて運転手になり運送業で人生のほとんどが終わったわな。40年間ほど運送業の仕事をやつて、定年になるまでも笠作り

は続けていた。冬は父親と一緒に自分で宮笠を作ったりしとつたで、それで、今現在があるんやと思う。

2. 父親の存在

親父のやる姿を動作として全部覚えてたつて言うことやな。だけど蟬笠(せみがさ)っていう笠の中で非常に難しい技術を使うのは親父に1回だけ教わったことがあったなあ。今までの中で完璧に作れたことなんかは一度もないね。笠は、全部手作りやもんでね、自分で完璧に作つたつもりでも10個並べてみれば10個が全部違うんやな。やつぱり手作りやで。

それにまあ、親父の作つた笠と比べてみると、まだ子供ぐらいのもんやな。中学校1・2年の時1つの仕上げの段階で自分で作つた笠を親父に見てもらつたら「こんな笠は、売り物にならん」て、言われて僕の作つた笠を、ぐしやぐしやにもんでまつて、ゴミ箱にほかれてまつたていうことがあつたなあ。

そのことは今でも心に残っていることやな。それで、何がやあだめなのかつて聞いても親父は絶対教えてはくれなんだな。「そんなものは笠を見よ！」て、「見てみりやわかるで見よ！」て言つて。今思えばまあそういうことがあつて、現在が当然あるんや



宮笠を作成中の問坂さん

3. 宮笠にとって大切な材料

宮笠っていうのは、松と一位を材料に使っている。

今、ホームセンターなんかで売っている笠は同じ松笠であるが実際まあ似てるんやけれども品質が劣る。やつぱり宮笠は、全てが手作りやし他の笠は大量生産を目的にしてるから、材料に使う木(一位)を使うんじゃなくて染めたものを使つてるわけやな。

宮笠は、位山の原生林の中に、一位っていう木が天然木である、それを村から頂いて作ってるんやな。一位には赤色のものがある、その一位と松を使つて紅白の宮笠を作っているもんで染めた笠とは品質が全然違うもんな。宮笠の主な材料は、松と一位なんやけれども、山から木を切り出すのも手作業なんやな。で、木を切り出す時期は決まつていて、水が渇水して下がった時に、伐採して来年の入梅前までにその材料を「ビデ」にしておかないといかん。入梅すぎると、ほとんど松なんかは、虫が入つ

てしまうんやわ。そして、シラツツと言う木材の回りの部分が、みんなカビてまうんやな。また、一位は一昼夜24〜5時間釜の中で煮るわけなんやさ。松は12月に「木材」を切つて、5月の下旬から6月までに、一位材料をロータリーに掛けて、そして、乾燥させて完全に腐らなくれば、その材料は5年も6年もそのまんまの状態で保存できるわけや。まあ一位で作れば、一位の良さもあるし、松で作れば、また松の良さもあるし…。

4. 何故この材料なのか

宮笠作りに材料として松と一位を使う理由はな、やつぱり松は、他の針葉樹と比べて、一番、まず弾力性があるっていうか、「やに」とかがほとんどないんやな。で、松なんかは、ご存知のように、木に「やに」が



問坂さんが作った蟬笠等

あるし、あと縦とか杉とかあいうものは、ほとんど弾力性が無い、だから、編むということについては不可能つてことやな。だから松が一番そういう意味では、笠には適しているんやないかな。

一位は、樹木の生えている場所が限られているんやな。だから暖冬の方には、ほとんど無いし、中部圏でもこの飛騨から、以北やけれども、それでもある程度、その原始林でいう一位ばかり林立しているところが、この位山しか、おそらくないんやと思うね。ポツンポツンと広い範囲で1本や2本は、生えとるんやけれどもね。

あと北海道あたりには、こちらの一位とはちよつと違う樹種で大体一緒みたいな物があつたんやけれども、あつちの木は、緯度が高いために、非常に固いつていうのかなあ、だから材料にはならん。位山系の木が、笠には適しているつていうことやわなあ。それとまあ色がついるもんで、赤みおんだ(帯びた)色がついるもんで、まあそういうふうな一位は材料にしても、案外粘るつていうか、強度があるもんで使つたんではないかなあ。昔からその材料かつていうと、江戸時代のころから一位つていうものについては、定かではないけれども、材料を蒸して口でへけるつていう時代は、松がほとんどで、んだん材料を機械でむくようになつて、一位が使われるようになったんではねえかと思う。その辺は、はつきり分からなければもね。材料は、村のほうから材料になりそうなる原木を僕が見て、それを分けて頂いて伐採し、自分で煮つするんやれども、材料を選ぶ時の根本としては、やはり節がないこと、そして特に、一位あたりは、中が腐



「森と木とのふれあいフェア」にて

りが入つたり、大きい古木でも、すつと、まっすぐ伸びた木が無いで、その中からいいのを選ぶんやね。

5. 希少なアーチスト

宮笠を作る人は昔に比べてすごく減つたなあ。昔はだいたい100人ぐらいは、生産してみえてたんやけれども、現在、組合に入つて生産している人は、3人しかおらんやな。だんだん需要がなくなってきたもんな。

中国産の笠に結局需要が動いていったんやな、宮笠の3分の1ぐらいの値段だし、宮笠の生産量も昔の10分の1ぐらいやで、とても太刀打ちできんわな。それに今、宮笠作りの後継者になる人がおらんやな。仮に若者が今までのものを全部捨てて、宮笠の作り方を習つて、後継者となつても、

宮笠で収入は1ヶ月作つて10万円なし15万円。やつぱり収入に全くめどが立たんのやね、それで後継者になつてくれる高校生が見つからんてか、出てこんのやわ。だから宮笠は今、危機的状況なわけやね、僕らしか居らんで。材料を作るのも、蟬笠を作るのも、普通の笠なら作る人は居るけれども、蟬笠は僕しか居らんでね。まあ後継者をなるとか、早急に対応していかんと、もう本当にのうなつてしまふもんなあ…。

6. 問坂さんにつての宮笠とは

宮笠を作つて嬉しかったとか喜びを感じたことは特に無いんやけど、後継者がなくなつて、現在では3人が生産するだけで、その中で父親が蟬笠という技術を持つておつて、別に習つたわけではないけれども、見よう見まねで作れるようになつたつていうことは良かったなあと思つておるわな。それに、仕事をして辛いと思つたことはないね。僕らの時代は、正直に働くつていうことが人生での観点やつたから、どんな時でも辛いとか、いやとかそんな風に思つたことは無いし、むしろ、張りがあるつていうか、仕事にばわわれているほうが、充実感があるわねえ!!僕にとって宮笠とは、やつぱり伝統工芸なので最後まで残していかないとつていう気持ちやなあ。だから親に習つてそれで終わつてまつては、僕も心残りやで、最後まで継続できるように技を継承していかなくつていう気持ちだ。